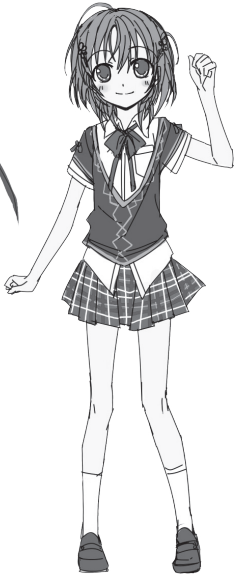
もっと!
妹とラブる!!
MOTTO! IMOUTO TO LOVE RU!!
小説 高岡智空　挿絵 章上明
立ち読み版

第一章　三人目の妹　006
第二章　不穏な雲行き　051
第三章　誘惑プールで陥落　088
第四章　大和撫子の乱れる夜　131
第五章　末妹の嫉妬　185
エピローグ　252

登場人物紹介

Characters



宝條月花（ほうじょうつきか）

二人の妹のうち下の妹。クール＆凛とした大人っぽい雰囲気ながら、それがデレるとたまらない魅力。匂いフェチ。

雛形葵（ひながたあおい）

雪花とクラスが同じ後輩。直希のことが気になっていて、自分も妹になると立候補。ふんわりマシュマロボディ。

宝條雪花（ほうじょうゆきか）

二人の妹のうち上の妹。小柄ながら頭の回転が速い策士。直希に対しても無邪気な密着アプローチが得意。

宝條直希（ほうじょうなおき）

非モテ男子の汚名を返上。妹二人と葵に愛されまくるデレデレの日々を過ごしている。

まだゴンドラは動きだしたばかり、降りるまでは相当の時間を要する。それまで勃起した男と二人きりでいるなど、普通の女の子なら嫌悪するのが当然のことだ。
申し訳なさから直希は身体を引き、なるべくゴンドラの隅に寄っておく。だが――。
「ひゃぁうっっ！　お、おお、お兄様っ、あんまり端に行かないでくださいっ、ゆ、ゆゆゆっ、揺れますっ、落ちちゃいますからぁっ！」
「おわっっ！　悪いっ、大丈夫かっ！」
ゴンドラが少し強く揺れ、パニクったように暴れた葵が、ゴンドラの端に座る直希に抱きついてきた。それをしっかりと抱き締め、宥めるように彼女の背を撫でてやる。
それによって、いきり立った股間が彼女の胸に密着していることにも気づかず。
「……どうだ、落ち着いたか？」
「は、ひっ……だだ、大丈夫、れひゅ……その……お兄様も、お元気そうでっ……」
「――――あっ」
顔を真っ赤にした彼女のそんな指摘に気づくも、端で密着されていては、これ以上逃れることもできない。彼女も動く気はないのか、恥じらいに染めた頬を俯かせ、モジモジと手と足を擦り合わせていた。
「すまん……その、色々あって……で、でも大丈夫だぞ！　葵にはなにもしないから！」
ポンポンと彼女の背を叩き、爽やかな笑みを浮かべてそう告げる、けれど――。
「……」

（えっ……えええぇぇぇぇ……）

返ってきたのは心底失望したというような、呆れた視線と冷めた表情だった。

「うぐっ……ほんと、すまん……幻滅しただろ？」

雪花の兄である自分と偶然知り合い、少しくらいは頼りになる、いい先輩だと思ってくれていただろうに。その先輩がところ構わず発情し、勃起するような男だと知れば、こうなるのも仕方ない。罵倒や誹りは甘んじて受けようと、頭を下げて言葉を待つ。

「――――あの」

そんな直希に、葵は意外な言葉をかけてきた。

「ぎゃ、逆ですっ！　そもそも私はっ、お兄様が、ゆっ――お姉様たちと、そういうことをしてるって知って、だからこそ妹に名乗りを上げたわけですから！」

「――――は？」

そういえばそうだったけど、そんな風に思って顔を上げると、真っ赤ながらも真剣な顔を見せて、葵は小さくガッツポーズをしてみせる。

「で、ですからっ……それの処理っ、私が担当していいですかっ？」

「……は？」

一瞬なにを言われたかわからず、つい反応が遅れてしまった。伝わらなかったと思ったのか、葵は耳の先まで赤く染めてさらに顔を赤くし、視線を下方に、つまりは膨らんだ直希の股間に向けて、指さして告げる。

「その……先輩、苦しそうですから……私に、させてくださいっ……」
「お、おう……いや、じゃなくて！」
ようやく理解が追いついて、間髪入れずにそう叫び返す。
「い、い、いいから！　無理しなくていいからっ、な？」
妹になって十数日ほど、そんな仮免教習中の妹に性処理させるなんて、兄としても男としても、人としても鬼畜すぎる。そもそもよそ様の娘さんを妹にする、ということ自体が間違った行動だと思うのだが。
「葵はそういうの、やったことないだろ？　そもそも俺にだって慣れてないんだから……気持ちは嬉しいけど、無理しなくていい。のんびり妹らしくなっていけば――」
真っ赤になった彼女の気持ちを案じ、傷つけないよう穏便に済ませるため、直希は言葉を重ねる。けれどそれを聞いた葵は眉根をひそめ、頬を膨らませて口を開いた。
「むっ……そ、そんなことありません！　無理なんてしてないんですからっ、えい！」
「話を聞けっ……のわっ！」
告げると同時の、パワフルで俊敏な動きに対応する暇もなかった。素早くしゃがみ込んだ葵は、片腕で直希を仰け反らせ、その膨らんだ部分を誇張するような体勢を取らせる。ズボン越しにそれを掴み、マジマジと見つめ――やがて、彼女の白い指先がズボンのファスナーを摘み上げた。
「そ、それでは、失礼いたしますっ」

「よせっての、葵！　しかもお前、震えてるじゃないか」
二人への対抗か、それでも軽々しく行為に及ばせてはいけないと、言い聞かせるように指摘する。すると葵はビクッと動きを止め、やがて申し訳なさそうにこちらを見上げた。
「は、初めてだからです……でも、やらせてください、本当に……」
そう言いながら彼女の手は、握ったペニスを優しく撫で、レバー操作するようにグリグリと亀頭を捏ね回す。ズボン越しではあるが、やたら気持ちのいいその手つきに、思わず直希は腰を引き、跳ねさせて悶えてしまった。
「わわっ、大丈夫ですかっ、お兄様！　すみません！」
「い、いや、平気っ……」
気持ちよくて、とは言えなくてそう返すのがやっとだった。ホッと胸を撫で下ろした彼女は、改めてというようにそのまま続ける。
「してあげたいんです、お兄様のために……お兄様にそういうことをしてもらいたくて、させてもらいたくて、妹になったんですから……だから、その――」
震える指でファスナーを下ろしながら、彼女が上目遣いになる。
「い、痛かったら、ごめんなさい……勉強中の身ですが、よろしくお願いします……」
（なにでっ⁉　ねぇっ、なにでナニを勉強してるのっ、葵さぁぁんっ⁉）
驚く直希の前で、ファスナーの内側へ手を入れた彼女は、トランクスのボタンを外してその隙間から、恭しく捧げ持つように、ペニスを滑りださせた。初めて触れる熱さ、脈打

つ躍動感、そして硬い感触に少し驚いたようだったが、そのまま目を見開いて、引きずりだしたペニスをジッと見つめる。
「お、おお、おっきい、ですねっ……硬くって、ビクビクしてっ……素敵です……」
「いや、その……どうも……む、無理はするなよ？」
はい、と答えた彼女の表情は、確かに無理をしているようではない。驚きに見開いていたのは最初だけ、いまの葵の瞳はうっすらと潤み、魅入られたように熱っぽく濡れて、羞恥ではなく微かな興奮で、頬も桃色に上気していた。
「真っ赤で、でもちょっと黒くて……わっ、ビクンッて怒ったみたいに跳ねてます。すごく、熱いですね……風邪とか、そういうのじゃないんですか？　そうですか……あっ、撫でたらピクピクしてますっ、可愛いですねっ……よしよし、怖くないですよー」
（……なに、この……なに、羞恥プレイ？）
自分のモノの状態を懇切丁寧に説明され、挙句に少女の手の平で亀頭を撫でられ、怯えないよう宥められてさえいる。天然なのか、こんな言葉責めを受けるとは予想外だった——上に、その手の感触がスベスベと心地よく、しかも柔らかく、押し当てるだけで粘膜塊を包み込んで、動くたびに快感が腰に突き抜けた。
「それ、では……お、おおっ、お口でっ、します！」
「っっ⁉　待て待て待てっ！　ちょ、ちょっと落ち着こうか！」
大胆に唇を開いた彼女を慌てて止めると、首を傾げて顔を上向かせてくる。

（こんなあどけない顔する子に、なんて……そもそも、キスもしてないのに――）

妹たちを毒牙にかけておきながら、そんななけなしの道徳心が込み上げた直希は、どうにか彼女を汚さずに奉仕欲を満足させるべく、折衷案を提示する。

「えっと……汗で蒸れて汚いし、その……口じゃなく、手でするってのはどうだ？」

「だからお口で綺麗にするんじゃないですか！　そう勉強しましたし！」

間違った教材は[redacted]のためにならない――なんて正論が浮かんだが、同時に感謝してしまう男のサガが憎い。そんな益体もないことを考えていると、少女が二つ結びの髪を掬い上げて耳にかけ、瞳をうっすらと細めて、半開きの口をペニスに寄せてゆく。

「んぁ……はっ、はぁっ……あむぅっ！」

「くっふっっ……おっ、ほぉぉっ……」

僅かに逡巡した彼女の様子に、直希がふっと気を緩めた、その瞬間――開いた口腔に肉棒が包み込まれ、濡れた熱い肉筒の中へ、ジュブジュブッと飲み込まれていった。不意を突かれた甘い刺激に思わず情けない声がもれ、ヒクッと肉棒を跳ねさせて、腰を動かしてしまう。動いた拍子に、漲り開いた肉傘が葵の上あごを抉り、僅かに奥へ埋まった。

「んぐぅぅっっっ!?　んむっ、んみゅぅぅっ……」

「わわわっ、悪い！　そ、そのままなっ、腰引くから……くっ……」

喉を突かれた衝撃に、瞳を垂れ下げた葵が涙目でこちらを見上げてきた。嗜虐衝動に駆られかけるも、それ以上の憐憫を覚えて腰を引き、代わりに髪を梳くように頭を撫でる。

「ごめんな、あんまり気持ちよくて……そのままでいいから、舐めてみてくれるか？」
ここまできては、断るほうが失礼だろうと、指導するようにそう声をかける。すると葵は肉棒を口に含んだまま、ニッコリと微笑んで、くぐもった声を響かせた。
「んぷぁっ……やっふぁり、おにいひゃまぁ……んちゅっ、ぺろぉぉ……んじゅっ、ぐちゅぅぅ……わはひに、おひゃぶぃ、ひゃへはかっはん、れふねぇ……じゅぶっ……」
（誤解っっ！　っていうか、なんだその、言葉責めっ……くあぁっっ……）
しゃべるたびに喉へ振動が響き、肉棒を疼かせるようにくすぐってくる。舌先が動いてピチャピチャと亀頭を舐め、裏筋を擦り、肉幹を往復するような動きで上下に這い回ってきた。想像もしていなかった快感に膝が跳ね、また少し喉奥に呑まれた肉棒が、大きく脈打って快感に悶える。
「あっ、跳ねまひら……んちゅばっ、じゅれろぉぉ……こぉへ、いいんれふね……うぇひぃ、れふ……んちゅっ、じゅるるっ、じゅぽっ、ぐぽっ、ぐぷぅっ……」
唾液を蓄えてピッタリと唇を閉ざし、その内側でグチュグチュと頬粘膜を動かされると、口を濯ぐように肉棒が濯がれてゆく。舌は丁寧に、舌腹を這わせて唾液を塗り込めるように、何度も肉幹を往復し続ける。上側に向かい、舌先が尖って裏筋をくすぐる、その動きにゾクゾクと背筋が震え、つい葵の頭を押さえつけてしまいそうだった。
「ちょっ、ふっ……う、うまっ……な、なんでっ、こんなっ……」
「んふふぅ……へんひょぉの、へーかれふっ♥　おねえひゃまからひいはり、おにーひゃ

まのひーふいひーみはりひて、あいしゅあいへに、ひてましたっ」
（なにやってんだあいつら！　自分たちで見るだけじゃなく、葵にまで……）
彼女の練習中の実技を浴びたアイスを恨みながら、無垢な少女に淫らすぎる指導をした実妹たちを叱り、今後はもっと複雑な隠し場所を用意しようと考える。
そんな風に直希が余所事を考えている間にも、少女の唇は空気を抜いて口腔を肉棒に張りつけたまま、頭を前後に揺すって激しく扱き立ててきた。時々蠢いて、敏感な粘膜を擦る舌の動きにも甘い快楽を注がれ、焦らされていた肉棒は完全な臨戦態勢に入る。
唇を押し上げるように肉幹を膨らませ、跳ねる動きで彼女の口腔のあちこちを叩き、小突いて刺激をせがむ。さらには扱かれるたびに尿口を震わせて、透明な雫をダラダラともらし、唾液と入り混じって、彼女の喉奥へゆっくりと流れ落ちた。
「んひゅ、ふぁっ、んみゅっ、ちゅむぅ……じゅるるっ、んくっ、はぷっ……」
無垢な少女は一心不乱にペニスをおしゃぶりし、時折苦しさから喉を鳴らして唾液を飲み込み、知らず知らずに男の体液を飲み込んでいる――そんな姿に背徳感を覚え、たまらなく興奮を煽られる。その刺激はさらに肉棒を大きくいきり立たせ、脈打つたびにドクドクと先走りをもらし、彼女の体内へ注ぎ込まれていった。
「あぁぁ……いいぞ、葵っ……舌で唾液掬って、扱きながら絡めてくれっ……」
快感を訴えて彼女の髪を梳くと、ンフゥッと甘えた声をもらして、葵が嬉しそうな笑みをこちらに向けてくる。まるで懐いた子犬のように、もっと構ってと甘えるような仕草で

肉棒を舐めしゃぶり、言われるがままに舌を這わせて、フェラ奉仕が熱烈に変化した。
「んじゅるるるっっ、んぇっ、えろぉぉっっ……れりゅっ、んぇおっ、ふぇるぅぅ……んくちゅっ、じゅぶっ、じゅるぅぅ……れろれろぉぉ……あむぅっ、ちゅぶっ……」
口は一時たりとも肉棒から離さず、直希の要望を汲んで舌を動かし、葵の口端から空気の抜けるクプッ、クポッといういやらしい音が響き渡る。ヌルヌルとした感触が肉棒を這い上がり、またゆっくりと這い下りて、肉幹の根元をベロベロと舐め擦った。
「ふっぐ……おぉっ、おぉおっっ……」
「んっふぅぅぅ……んちゅぽっ、ぬぽっ、くぽっ、ちゅぽぉっ♥」
直希が簡単に声を痺れさせると、それを聞いて得意げに瞳を細めながら、少女は激しく頭を振り立てた。締めつける口腔の感触は、膣肉のそれと比べてもまるで遜色なく、精液を搾るように快楽を与え、根元から先端までを余さず扱き立ててゆく。
「んじゅぶっ、じゅぽっ、じゅっぽぉっ……ろう、れふか、おにいひゃま……んちゅっ、ちゅぽっ、ぐぷっ……ぬちゅぅぅっ、んれろぉぉぉ……ふぇおぉぉぉ……」
丁寧に亀頭を舐め清め、唾液をこぼさないように葵は唇を開き、咥えられた肉棒の様子を直希の視界に晒し、見せつける。テラテラと濡れ光る肉棒がビクンッと跳ねて唾液の雫を飛ばし、濡れた唇を裏筋で擦り、快感を訴えていた。
「んぷぁっ……んふっ、はぇ……ふぇろぉっ、れろっ、んぇおぉぉぉ……」
舌先で裏筋をくすぐり、ゆっくりと亀頭の頂点に達したそれが、蓄えた唾液をトローッ

と先端から塗し、肉棒に垂らし落としていった。今度はその肉幹に横から咥えつき、唇で挟んで緩やかに扱きながら、舌でなぞってゆく。

「ふぉぉっ、おうっ、おっ……んっ……いい、すげーいいぞ、葵っ……」

言葉で褒めながらも、頭を撫でることは忘れない。そうすると幸せそうに瞳を細めて、葵は口元や頬、あごに首筋と、顔中を自分の唾液塗れにして肉棒に口擦り、頬擦りを浴びせながら、愛おしそうに舐め上げた。

チュパチュパ、ジュルジュルといやらしい音を響かせるたびに、彼女は小さな鼻をヒクつかせて、肉棒から立ち昇る牡臭を嗅ぎ取っている。深呼吸のようにスゥゥッと大きく息を吸ってから吐きだしたその唇は、蕩けきったように弛緩して、唾液を縁から垂れ流していた。見咎めた直希が指先でそれを拭うと、申し訳ないです、とばかりに二本のおさげ髪を揺らしてパクンッと咥えつき、肉棒と一緒にペロペロと舐めしゃぶる。

「んぅぅぅ、にゅむ、ちゅぱぁぁ……おにーひゃまの、ゆびもぉ……きぇい、きぇいにぃ……ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぷぅぅ……んりゅっ、ちゅれろっ……」

悪戯心から指を口内で動かしてやると、取り押さえるように舌がくねり、その感触が肉棒を擦ってたまらない快感に変わる。指とペニスで舌を挟むように押さえつけると、今度はビクッと肩を跳ねさせ、ムーッと呻きながら顔を動かして舌に力を込め、それでもうまく動かせないらしく、涙目で懇願するように見上げられた。

「んみゅぅっ……はふっ、んちゅっ……れろっ、ぺろぺろ、ぺろぉぉ……」

「……動かしたいのか？」
「んひゅぅっっ♪　んれろっ、れろっ♪」
笑顔で頷き、窮屈な状態で舌がくねる。その仕草に亀頭を軽く扱かれ、身震いするように腰が跳ねさせられた。なによりも、素直な態度と甘えた仕草が、たいそう可愛らしい。デート中は見ることのなかった、積極的な甘える態度に胸が熱くなり、舐められていた指を抜いて、彼女の頬を優しく撫でてしまう。
「ほら、抜いたぞ……続けてくれ、葵」
「んっ、はぁいっ、お兄様ぁ……ちゅぶぅ、じゅるるるっ……んちゅぽんっ♥」
もう一度、髪を掬い上げてから、肉棒の根元を押さえて口奉仕を始める葵。そこで生じた悪戯心その二から、今度は彼女の腕を掴んで小さな万歳の状態を作らせる。と――。
「んぅ～～～～っっ……んちゅっ、ちゅぽっ、じゅぽじゅぽっっ、ぬぽぉっ♥」
一瞬だけググッと腕に力が入ったが、動かないことにすぐさま諦め、代わりとばかりに激しく頭を揺さぶり始めた。鼻息が肉幹を伝い、震える根元は滑り下りた唇がキュッと締めつけて固定し、そのまま一気に亀頭の先まで扱き上げてゆく。
唾液が隙間から流れて落ちるのも、往復するたびに彼女の口腔へ舐め取られ、フェラチオの潤滑油となってペニスに塗されている。塗されたそれは、蠢く舌で丁寧に塗り込められていき、直希の劣情を根幹から刺激し、高めてゆくようだった。
「すっげ……葵、本当に上手だ……経験豊富みたいだぞ」

「んはうぅぅっっ……ふぁっ、ふぅぅぅんっ……そ、そんらのぉ、き……きまっへ、りゅ……決まってりゅよぉ、あ、あらひのぉっ……」

尻穴に埋まる指と、お腹と太ももを抱えるような体勢で支えられたまま、器用に腰を揺すって指を腸粘膜に擦らせながら、全身を震わせて雪花が告げる。

「お、おひりぃっ……♥　あ、らひのぉ……や、やらしいっ……お尻、オマ〇コにぃぃ……んっ、くふぅぅっ……お兄、ちゃんっ、のぉっ……お、ちん、ちんっ……愛情っ、たっぷり注いでぇっ……」

張りのある、それでいて柔らかい感触が指に伝わり、滴った腸汁が手の平に溜まってシャワーの飛沫で流れ落ちてゆく。卑猥なおねだりを口にして、双穴の奥が芯から疼いてしまっているのか、雪花の肉襞は指を食むように蠢いて、先ほどから止まることなく痙攣し続けていた。

「――いい子だな、すっげーエロくて……最高の恋人だよ、雪花は」

「くひぃぃぅっっ……んぁっ、お、おにい、ひゃっ……んぁっっ！」

粘膜を軽く抉りながら、腸液を滴らせる指を引き抜くと、両手でしっかりと雪花の足腰を支える。指が抜けても開ききったままの尻穴に、いきり立ったペニスを押し当てると、それだけで発情した肉皺が、亀頭に吸いついて一気に飲み込もうとヒクつきだした。

「くっっ……すっげ、粘膜うねってるみてーだぞ……食いしん坊だな、雪花のここは」

「んひうぅぅっっ！　あっ、んぁぁっ……はひゃっ、はやっ、くぅぅぅんっ……」

からかうような言葉にも反応せず、肉皺を広げて亀頭に咥えついた、その刺激だけで尻房をわななかせ、声を上擦らせた雪花がおねだりをする。これ以上焦らしても可哀想かと、直希は謝るように後頭部に口づけてやり、そのまま一気に腰を突き上げた。

――ズニュゥゥッッッ、グプッッ、ニチュゥゥッッ、ズブゥゥンッッ！

「んくひぁぁぁ――――っっっ⁉　はひっっ、はひぃぃぃっ……入って、き、きひゃっ、はぁぁぁんっ♥　あくっっ、くっふ、んふぁぁっ……」

内側の蕩肉膜はどこまでも柔らかく、煮込まれた脂のように熱く蕩けて絡みついてくるのに、弩張を咥え込んだ肛門は、肉棒をキツく噛み締め、ギチギチと軋みを上げた。挿入する先端部分が腸粘膜に包まれて、凄まじい快感がペニスを満たし、睾丸の奥へ染み込んで、射精を煽る心地よさを込み上げさせる。

「ふぐっ、おっっ……こ、らぁっ……あんま声、だすとっ……周りに聞こえるだろっ」

「んふぅぅぅっ……はっ、んぐぅぅっ、ら……らっ、ひぇぇ……しゅごいっ、きもひっ……気持ち、いいんらもぉんっ、お兄ちゃんっ……あんっ、くあぁぁぁんっっ！」

甲高く嬌声をもらし、雪花の直腸はウネウネと波打つように蠢き、直希の肉棒を奥まで引き込もうとする。食い千切られそうなほど根元が引き締められ、動くたびに扱かれているような感覚が迸り、意識もしないのに腰がガクガクと跳ね上がった。

射精を促す快感がペニスの根元を満たすと同時、亀頭が蕩けた肉襞にしゃぶられ、裏筋に粘膜が張りつき、チロチロとくすぐるように刺激を送り込む。快感に呑まれ、たまらず

腰を引こうとしても、彼女の貪欲なお尻がそれを許してくれない。脈打つ肉幹が菊壺を犯して捻じ込まれてゆくたび、そこにも蕩肉の刺激が纏わりついて、唾液たっぷりのフェラチオのように舐め蕩かしてくる。

「あくっ、あっっ……んひぁぁぁっっ……お、お兄ちゃんっ、お兄ちゃぁぁんっ♥」

こっちだって思わず暴発してしまいそうなほどの、ペニスごと精液を啜られているかと錯覚するような快感に包まれているのに、それ以上の快楽を、妹は感じているようだった。膝を揃えた駅弁姿勢で、抱え上げた太ももがブルブルと震え、背筋は先ほどから何度も反り返り、跳ね上がった頭の後ろが直希の胸元を叩いている。

「お兄ちゃんのぉ……んくっ、くふぅぅっ……す、ごぉっ……くっ、んぁぁっ……あっ、はぁぁぁ……お尻で、ビクビクンッて、震えてるのぉ……しゅ、ごひぃぃ……」

瞳の焦点をずらし、うわ言のようにささやきながら、雪花が僅かに腰を動かす。その小さな動きだけで、硬く膨れた直希の肉棒は彼女の菊壺を捏ね回し、さらに深くへ亀頭を押し進ませた。

——ヌチュッッ、グポッ……ヌジュポォォッ、ヌプッ、グチュプゥッ……。

「んひぃぃぃっっ！　いひぁぁっ、はぁっ、お、おにぃ、ひゃぁっ……んぁぁっ♥」

抱き上げた少女の身体がビクビクッと痙攣し、足先が愛らしく丸まって跳ね躍り、感極まった己の官能の昂りを伝えてくる。半開きの唇がハァハァと吐息をもらし、その甘い香りが顔を寄せた直希の鼻先をくすぐり、溢れる果汁のような唾液の——雪花とのキスの味

を思いださせ、さらに股間をいきり立たせた。
「雪花っ……雪花っ、こっち向けっっ……んぷっ、くちゅっ……じゅるるるっ……」
「んっむぅぅぅんっっ⁉　んぐっ、じゅばっ、じゅるぅっ……んちゅぷぅぅ……」
雪花には横を向かせ、直希は目いっぱいに首を伸ばして、蕩けだした彼女の唇を飲み込むように啄み、貪るように啜り上げる。溢れた唾液を飲み下し、こちらからも舌を伝わせて唾液を流し込み、こぼれないようピッタリと口づけで塞いでしまう。
「んちゅぅぅっっ！　ふみゅぅっ、んちゅぽっ、じゅぶっ、くちゅぅぅ……」
開いた唇を合わせた、互いの吐息が絡み合う口腔の空間で、唾液を泡立たせながら舌が躍り重なる。互いの性器を舐め合っているかのような快感が口を満たし、啜り合う唾液を介して身体の奥へ染み込み、さらなる快楽を求めて、より強く舌が押し合わさっていた。
「じゅるぉぉっ……んぐっ、じゅぶっっ、んちゅぽぉっ……ちゅぽっ、ちゅぽっ……」
僅かに顔を離しても、妹の唇は兄の舌を逃すまいと窄められ、歯先で甘噛みしながら追いかけてくる。窄まった雪花の唇に舌を抽挿させ、唾液を絡めて粘膜を擦る、卑猥な水音を奏でながら腰を揺すり、同じようなくぐもった音を、尻奥からも響かせてゆく。
「んにゃあぁっっ！　んひっ、ひやっ、ひゃらぁぁっ……んぅっ、お、音ぉっ、とまっへ……んぎゅっ、ひぐっっ、んんぁぁっ……」
尻穴と唇から、同時に抽挿の音を響かせた妹が顔を真っ赤にし、恥じ入るように顔を振って、直希の視線から逃れようとする。舌を甘く舐めしゃぶっていた唇が遠のき、代わっ

て形よい耳朶がこちらを向いた。
「――ゆーきか、駄目だろ……ほら、こっち向きなさい」
「んひゅぅっっっ!? ひぐっ、ひはっ、あひぁぁぁ……」
躊躇いもなく耳朶にむしゃぶりついて、彼女が直希の舌へそうしたように、歯先で甘く噛み扱き、顔を振って唇に咥え込んでしまう。途端に雪花が下半身を大きく揺すり、菊肉をうねらせて肉棒を締めつけ、声を震わせて喘ぎをもらした。
「なんだ、耳も弱くなったのか、雪花……こんなに弱点だらけになったら、心配になってくるな。普通に生活してて、変な声とかだしてないだろうな……なぁ、雪花?」
「ひぐぅぅっっっ! んぁっ、くあぁぁぁんっっ……はひっ、ひぃぃぃんっ……」
耳朶だけを集中しての刺激、それに慣れかけたのを見計らって、今度は一気に耳朶を口腔に咥え込み、舌は耳穴へと捻じ込んでゆく。くすぐるように舌先を躍らせ、耳朶を口内で転がしながら、耳の穴とその周りまで丁寧に舐め擦ってやると、効果は覿面だった。
「んひあぁぁぁっ♥ はひっっ、ひてっ、ないぃぃっっ! ないよっ、おにっ……おにいひゃあぁぁんっっ! ひょんら、こ、こえぇ……れったい、ら、らひてにゃいぃ……」
呂律の回らない口調で言葉を蕩けさせ、耳奥と腸奥へ注がれる異なるタイプの快楽刺激に、心から酔いしれているようだった。けれど、快感に身体を躍らせ、思考を白くし、心地よさに翻弄されながらも、彼女は妹としての矜持だけはきっちりと守っているらしい。
「はぅっ、はっ……あら、ひはぁぁ……こんな、とこぉっ、お兄ちゃんっ……お兄ちゃん

にしか、見せないっ……き、聞かせ、ないもぉんっ……くおぉぉんっっ♥」

抱え上げる腕の力を緩めて腰を突き上げると、結腸にまで亀頭がめり込んだ。その衝撃に思いきり体重を支えられた雪花が、耳への快感を振り切るような動きで背中を丸め、ビクビクッと大きく震える。その状態で懸命に顔を振り返らせ、真っ赤になった潤み顔で直希を見つめ、熱っぽく訴えかけた。

「おにぃっ、ひゃんのぉっ……んっ、こっ……こぉぉんっ……こい、びとっ、らもんっっ……声も、顔も、そ……それ、にっ……身体もっ……全部、隅々まれぇぇ……」

声をだすたびに唇がわななき、舌先がピクッと跳ねて唾液と飛ばす。それを優しく舐め取ってやると、兄の愛情を感じた妹の顔がうっとりと幸せそうに緩んだ。落ち着かせるように頬を啄み、舌を舐め、唇にバードキスを十回、二十回、それ以上にと何度も繰り返して愛情を伝えると、少し強張っていた少女の身体が、腕の中で再び弛緩する。

「んひゅっ、ふぁ……ひぁぁぁ……んっ、しゅみ、じゅみぃ、まれ……れんぶ、お……おにいひゃんの、らからぁ……」

「――ありがとうな、雪花」

片腕を脚から抜き、体勢が楽になるよう、床に腰を下ろした。雪花は肉棒に座り込むような格好になり、尻奥に突き抜けた衝撃で、一瞬だけいやらしく呻いたが、そのまま頭を撫でてやると、たちまち相好を崩して、甘えるように身を預けてくる。

「お兄ちゃん、以外に……なんて、しゃ……しゃわらせ、ないもんっ……だからぁ……だ

か、らぁっ……いっぱいしてっ、お兄ちゃんで……グチャグチャにしてぇっ……」
　言いながらも肉棒の圧力を腸襞いっぱいで感じ取っているのか、尻房で直希の腰を撫でるように身動ぎするや、雪花は甲高く声を跳ねさせ、背中を反らせて震え上がった。
　小刻みに痙攣する妹の身体を抱き、片手を水着の裾から乳房へ滑らせ、挿入を求めてヒクつき続け、おもらしのように蜜液を吐く秘唇へも反対の手を這わせる。僅かに触れただけで雪花が腰を跳ねさせたが、そんなことは気にもせず、潤んだ膣穴に軽く指を埋め、ザラついた肉襞の一部分だけを執拗に押し捏ねてゆく。
「ほら――ここだろ、グチョグチョにされたいのは」
「んひっっっ、きひぁぁぁぁぁっっっ!?　あぃっ、んぃぃぃっっ！　しょぉぉっ、しょこっ、そっちもぉっっ！　ずっとぉっ、してほしかったのぉっ！」
　絶叫するように淫らな欲望を言い放ち、その瞬間、弄り捏ねている膣口の少し上から、勢いよく透明の飛沫を吐きこぼす雪花。Gスポットからの刺激をダイレクトに牝肉で味わわされ、水流が噴き上がるたび、腰が浮き上がっていやらしいダンスを披露していた。
「こっちだけか？　じゃあもう、こっちのチンポは抜いていいんだな？」
「んひやぁぁぁっっ！　やらっ、やめっ、らめぇぇっっ♥　お兄ちゃんのっ、カッチカチのチンポはしょこらのぉぉっ！　おひりかぁっ、ぬ、抜いちゃひゃめぇぇっ！」
　雪花の身体を持ち上げ腰を引こうとすると、そうはさせまいと尻穴がキュッと窄まり、波打つ菊壺でギチギチと肉棒を締め上げてゆく。いつも明るく愛らしく、兄への尊敬と愛

情を隠そうともしない妹が、時折見せるワガママさ――その態度と拗ねた表情を心から堪能し、お尻を引き締めてフーッ、フーッと荒く息をもらす彼女の頭を優しく撫でる。

「そうか、ならしっかり動かしてやるよ……雪花のお尻が開ききって閉じなくなるくらい、徹底的に穿ってやるからな？」

ささやくと同時に身体を起こすと、床に蹲（うずくま）るような四つん這い体勢にさせ、背後から勢いよく腰を叩きつけてゆく。突きだされた尻房の肌がピンと張り、それを直希は両手で割り開いた。肉棒を咥え込む桃色の肉皺を目いっぱいまで伸ばした、誰の目からも隠さなければならない不浄の穴が、視界に晒しだされる。

「んにゃああぁぁぁっっ⁉　ひゃめぇぇっっ、突くのっ、抜くのっ、ゴシゴシするのいいけどぉぉっ！　みひゃやっ、見ちゃ、やらぁぁっっ！　あうぅぅっっ、んくぅぅっっ！」

抵抗の声を上げるも、腰を大きく引いて長いストロークで亀頭を押し込むと、その衝撃に喉を晒して背を反らせ、雪花の身体はビクビクンッと、たちまち肉悦に悶えた。抵抗が止んだところで、伸びきったアナルの肉皺を指で擦り、爪を立てて優しく掻いてやると、頭を振り乱した雪花が激しい嬌声を張り上げる。

「んひっっ、いひぃぃぃぃ――っっ！　んくぁっ、くひはぁぁぁっっ！　あうぅぅっっ、んぃっ、イクッッ……イクぅぅぅっっ、イグイグッッ、くふぅぅぅんっっっ♥」

Gスポットを捏ねられても口にしなかった叫びが、肉皺への刺激とアヌス抽挿だけで獣のように迸り、先ほど以上の牝潮噴きを晒して、雪花の小さな身体が絶頂に震えた。身体

の奥に響く快楽の波を馴染ませるため、今度は一転してゆっくりと、亀頭でアナルを引っ張りだすように腰を捻って、背中側の腸粘膜を肉傘で擦り立ててゆく。
「んくほぉっっ、あおぉぉおっっっ……んぐっっ、くぃあああぁぁぁぁ――っっ♥」
「っっ……だからっ、声を抑えろって……言ってるだろ！」
そんな直希の注意も聞こえないくらい、雪花の理性はトロトロに崩れているようだった。赤く充血した菊粘膜がひょっとこ口のように引き伸ばされ、亀頭に吸いつきながら肛門の外側へ姿を見せる。それが離れない限界点までミリ単位の動きで腰を引き、腸壺にペニスの動きが刻み込まれるよう、またゆっくりと粘膜を掻いて肉棒を押し戻していった。
「んぁうっ、おっ……んあぁぁっっ……はひって、くりゅっ、ふぅぅんっ……」
――グニュゥゥゥッッ、ズニュプッッ、ツプゥゥゥッ……グポォォォ……。
粘膜の擦れる放屁のような音を響かせて、敏感なアナル粘膜を跳ねさせて、雪花が肛姦刺激に酔いしれる。緩やかな動きのまま、戯れに乳首を手の平で転がしてやると、キャウンッッと愛らしい悲鳴をこぼして背中が丸まり、まだ途切れない絶頂の余韻を受けた肢体が、ビクッビクンッと小さなオルガスムスに跳ねた。
（あぐぅっ――くっ、俺ももうっ、そろそろ……このまま一気に――）
そう思って直希が腰を引いた――まさにその瞬間だった。
「……あ、あのー、さっきから叫んでるように聞こえますけど……大丈夫ですか？」
シャワー室のドアが小気味よくノックされ、冷や水のように声がかけられる。それを聞

いてハッと我に返ると、隣の個室の水音が止んでいたことに気がついた。先ほど入った女性がシャワーを止め、そのせいなのか、雪花の喘ぎが僅かに響いてしまったらしい。

「あのー、開け――られないですね、さすがに……けど、返事がなかったら人を呼ぶしかないんですけど、大丈夫ですかー？」

繰り返しノックされ、中の――つまりは雪花の安否を確認してくる女性客。だが、ここまで盛り上がった感情と欲望を止められず、直希は腰を振りながら雪花に告げる。

「……ほらみろ、あれだけ言ったのに、雪花が声抑えないからだぞ？　とにかく返事しておかないとな、大丈夫です、気持ちいいので――って」

「んひあぁぁあっっ⁉　う、しょっ、やぁっ……んもっ、お、おにいひゃっ、んぅぅっ！　へ、へん、たいっ……いじわりゅぅぅっ……」

この状況でも腰を止めず、妹に羞恥を味わわせる兄の指示に、顔を真っ赤にした雪花が罵倒を浴びせる。けれど伸びきったアナル皺を擦ってやると、それだけで少女の唇は蕩けてしまい、フニャフニャとした声でドアの向こうに叫んでいた。

「んらっ……らひっ、じょぶぅぅっ……んくぅぅっ、れしゅぅっっ！　へいっ、きぃぃっ……ちょ、ちょっとぉ……シャワー、きっ、きもひ、よくてぇ……いひぁぁぁっ♥」

「――あ、ああ、そう……その、えっと……ほどほどにね……」

危ない相手とでも思ったのか、かなり引き気味の女性の声がかけられ、気配が遠のいてゆくのがわかった。叫び終えた雪花は頭を抱えるように蹲って、全身を羞恥で真っ赤に染

めたまま、ヒクヒクと背中を震わせている。
「――あーあ、シャワーでオナってるって思われたぞ。雪花はエロいなぁ」
「～～～～～～っっ！　お、おにいひゃんのせ――んひいいいいっっっ⁉」
予想通り、反射的に言い返そうとした妹の口が開くと同時、引いていた腰を勢いよく叩きつけて、結腸を押し潰すように亀頭をめり込ませる。そのまま小刻みに動いてパンパンと尻肉を打ち据えながら、両腕を腋下に通して身体を起こす。
少し膝は痛いが、互いが膝立ちになって座り、腰だけを激しく振り乱し、腸奥へ肉棒を抽挿させ続ける。僅かの余裕もなく菊壺を抉られ、呼吸を乱した雪花はガクガクと震えて、声にならない呻きのような喘ぎを響かせていた。
「んぐぉぉぉぉっっ、おぼっ、おぐっ、んんぉぉぉっっ！　あひっ、いひはぁっ！」
――ズブンッッ、ジュブッ、プチュッッ、グチュンッッ！
粘膜がひしゃげ合う、卑猥で激しい性交音を奏でながら、妹の身体はゾクゾクッと感極まったように反り、股間を前方へ突きだして下半身を弛緩させる。アナルを肉悦から逃がそうとしているような動き、けれど直希の腰振りはそれを逃がさず、尻房へ鞭打つようにパンパンと腰を打ちつけ、互いの快感を限界まで引き上げていた。
「んもぉぉぉっっ、おひっっ、おひぃぃっ、ひゃあぁぁっっ！　んもっ、もぃっ、いぐっっ……まらイクッッ、いぐのぉぉっ、おにいっ、ひゃあぁぁっっ♥」
「くぅぅぅっっ――俺もっ、そろそろっっ……だすっ、一週間溜めたっ……精液全部だっ

っ……雪花の腹に、思いっきりブチ撒けてやるからなぁっ……」
「きへぇえええぇっっ♥　きへっ、らひてっっ、びゅーびゅーちょうらぁぁぁいっ！」
蕩けた声が迸った瞬間、肉壺がグニュグニュと蠢いて肉棒を扱き、愛らしい色を残す菊穴が思いきり引き締められた。根元から先端までを揉みしだかれ、亀頭に吸いついた腸襞がズルズルと裏筋を這い、尿道の奥に込み上げる精液を啜り上げてゆく。
「くっっ、おっっ……おおぉぉおっっ！」
背筋が震えると同時、自然と腰が前に押し上げられた――というよりは、雪花のアナルに引っ張られたような感覚が迸った。最奥をさらにこじ開け、根元までピッタリと菊壺に埋めた肉棒が、括約筋を弛緩させるや快感の波に包まれる。
「んっっあぁぁぁぁっっっ！　まはっ、ふくらみゅっっ、おにっ、ひゃんのぉぉっ♥」
尿道を込み上げる精液に圧迫され、肉棒がさらに大きく膨れ上がる。その感覚に肉壺を擦られた雪花は嬌声を上げて背筋をピンと伸ばし、お尻を背後に突きだし――肉棒を自ら奥まで迎え入れて、絶頂の喘ぎを叫び放った。
「んくぃぃぃぃぃっ、ひはっっ、いひあぁぁぁっっ！　らめぇぇっっっ、おひりにしぇーえきぃぃっ、いぐっっ、いぐいぐぅぅっ、イクぅぅぅんっっっ♥」
――ビュクルゥゥッッッ、ドプドプドプッッッ、ドビュルゥゥゥッッッ！　ビュクビクッッ、ドビュルゥゥゥ～～～～ッッッ！　ビクッ、ドプッッ、トプトプッッ！
雪花が叫び、尻肉が一気に窄まり――その締めつけをものともせず尿道を押し開いた、

固形物のように濃厚な精液が勢いよく溢れ飛び、熱いドロドロの迸りがお腹の奥へ注がれてゆく。射精にペニスが脈打つたび、雪花の僅かな腰の動きが肉棒を扱いて射精を促し、止めどなく絶頂が続き、快感の痺れが脳髄を蕩けさせるようだった。

「おっ、ほっっ……ふぅぅぅっっ……んぐっ、くっっ、おぉぉおぉおっっ！」

雄叫びのような声を上げて、雪花の身体を引き寄せながら腰を突きだし、射精に合わせてこちらも腰を振り、噴きだす精液の一滴をも余さず、蕩けきった妹の牝菊穴へ種付けてやる。もちろん孕むことはないけれど、刻むのは直希の牡欲、直希の形、直希の熱さ――そして直希の愛情、思いやりのすべてだ。

「んぐあおぉぉおっっっ‼　んぉふぅぅぅっっ、ふぐっっ、んぃぃぃいっっっ……いふぅぅっっ、いぐっっ、あんんぅぅぅっっ！　いぐっ、いっぐぅぅぅっっっ！」

ドップドップとポンプのように肉棒が精液を噴き上げる、その熱さに腸粘膜を灼き焦がされて痙攣する雪花は、四つん這いから身体を引き起こされたような体勢のままで、ひたすらに獣のような絶頂声を響かせていた。

「ほらっ、まだだっ、もっと出るっっ……だし尽くすまでっ、イキまくれ雪花ぁ！」

「んんぅぅっっ！　はひっっ、いひはぁぁっ……いっ、いふっっ……んぃっ、イクぅぅっ……おぉはぁぁっ……あぐっっ、またイクぅぅっっっ♥」

膝立ちになって、太ももで止めたビキニ水着のせいで脚を開けない雪花の、閉ざされた太ももに黄色の液体がジョロジョロと流れ落ちてゆく。膝を濡らし、シャワーの水と混ざ

ったそれは排水溝に注がれ、個室内に卑猥なアンモニアの臭いを広げてしまう。
「そんなによかったか、雪花……ほら、おもらししちまってる。お尻に精液浣腸されて、潮噴き、本気イキ、最後はおもらしまで……ほんっと――」
揶揄するような言葉を響かせると、快楽に蕩け呆けた顔ながら、兄に嫌われるかもしれないという妹の本能からの恐怖に、雪花は表情をクシャリと歪ませた。けれど、そんな心配はあまりにも些末だとばかりに鼻で笑い、直希は濡れた彼女の頭を掻き撫でる。
「ほんっと――可愛いな、可愛すぎるぞっ、雪花ぁ……」
「お、にい、ひゃ……あぐっ、んぁっ、あぁぁぁぁっ……うあぁぁぁっっっ！」
ボロボロと涙をこぼして呻き泣く少女を何度も撫でてあやし、頭にも肌にも、唇が届く範囲には絶やさず口づけを浴びせて、抱き締めた腕はけして放さない。
そして――一度の射精くらいでは萎えない、ヤリたい盛りの男子学生が一週間溜めた性欲の滾りは、肉棒をさっき以上に硬く張りつめさせている。白濁をたっぷりと注がれ、牝本能に震える腸粘膜が勃起に擦られると、その微かな刺激だけで、雪花はさらに濃厚なアクメ快感を味わわされ、身を縮めてビクビクと感極まっていた。
「まだ続けるぞ……誘ったのは雪花なんだから、付き合ってくれるよな？」
「んひぅぅぅっっ……んぐっ、ひょ、れ……はぁぁ……あうぅっっ……」
一度しか射精していない直希に対し、雪花はすでに、細かいものを入れれば五回ほども絶頂させられていた。けれど力強く抱き締めてくる兄に――愛しい相手にそう告げられて、

無理ですと拒絶するような発想が、肉欲に溺れた雪花の頭に浮かぶはずもない。

「ど――どうぞっ、おにい、ちゃっ……んぅぅ……お兄ちゃんの、好きに……して、ください♥　お、おしり、でもぉ……オマ〇コでも、好きなほうで――」

なによりも、兄の愛情をしっかりと繋ぎ留めるため――聡明な雪花の頭脳は、合理的な判断として、閉園ギリギリまでひたすらエッチする、という選択をするのだった。

◇

「――ど、どうしたんですかっ、これは！」

「あらまぁ……雪ちゃん、どうしたの？」

帰って玄関を開け、ただいまと告げるとすぐに、妹と母親が出迎えてくれた――までは、問題なかった。しかし長男に背負われた長女の姿を、兄に背負われた姉の姿を目にして、月花も母も、瞳を丸くして事態の詳細を問いかける。

（四回射精するまでエッチしてたら、雪花が腰を支えられなくなりました――）

なんてこと言えるわけもなく、口裏を合わせていた通り、雪花がはしゃぎすぎてフラフラになった、ということだけを伝えておく。母親のほうは困ったように微笑み、まだまだ[redacted]ね、と雪花の頭を優しく撫でて、部屋に送りだしてくれたが――。

「……そーですか。はしゃぎすぎて、ですか」

ジト目でこちらを睨む妹は、さすがに誤魔化せなかったらしい。雪花を部屋に運び、ベッドに寝かせて優しい言葉をかけ、最後には額にキスまでして、安静にしているよう言い

聞かせている間――実に十数分間ずっと。
「兄さんの淫獣、絶倫、肉欲魔、破廉恥、変態、最低、大好き――」
等々――最後のは違うが、ほぼすべてを下半身のだらしなさを責める悪口で埋め、呪詛のように呟き続けていた。
「と、ともかく、ゆっくり寝てろよ？　また夕飯になったら起こしてやるから……」
そう言い置いて部屋を出ようとしたところで、こちらの足裏をゲシゲシと蹴りながら、あとに続こうとしていた月花を、雪花が呼び止める。
「あ――待って、月ちゃん……お願い、一つだけ……」
「――わかりました。兄さんは先に戻っていてください」
そう言われては、残るわけにもいかない。おとなしく部屋を出たせいで、二人が交わした言葉の中身は、ついぞ聞くことができなかった。そして――。
「……なにがあったんです、本当に……ちゃんと、兄さんは誘えたのでしょうね？」
「ごめん、無理だった……やっぱり、お兄ちゃん棒には……勝てなかったよ……」
そんな会話後、予想通りの結果に月花が絶句し、羨ましそう、かつ恨みがましい視線を姉に向けつつ――次は自分の番ですと決意したことにも、気づくことはできなかった。

（――いや、いつもは裸とか、スカートありでパンツ半脱ぎとかあるのに……）
雪花に至っては裸エプロンで、学校内で行為に及んだことさえある。それを考えれば、スカートを穿いたままでショーツがないくらい、なんてことないだろうと思うのだが。
（まあ、うん……これはこれで恥じらいがあって、二人とも可愛いからよし）
顔を真っ赤にしてスカートを脱ごうと奮闘する妹たちを、ニコニコと笑って眺めたまま、直希は欲望塗れのリクエストを口にする。
「それじゃ、二人で抱き合って寝転んでもらえるか？　どっちが上でもいいけど、体格的には雪花が上のほうがいいだろうな」
一度はやってみたかった、二人を縦に並べるという贅沢なプレイだ。これぞ男の夢とばかりに直希は満足げだったが、その言葉を聞いた二人の顔は、言葉を失ったように口を開いており――やがて、諦めたように大きくため息を吐くのだった。

◇

ベッドの上、掛け布団を押しのけて月花が仰向けになり、その上へ抱きつくような体勢で、雪花がうつ伏せにのし掛かる。
「ん、しょっ……こ、これでいいの、お兄ちゃん……？」
「……っ……さ、最低っ、最低です、兄さんっ……こ、こんな体勢で、なにをっ……」
どちらも顔を真っ赤にしているのは同じ、けれど雪花は恥ずかしがりながらも、これからされるいやらしい行為を期待して、僅かに唇を緩めてこちらを――お尻側から二人を眺

める直希を振り返っていた。月花のほうは、抵抗したくとも雪花が上にいるせいで暴れることができず、脚をくねらせながら股を閉じ、ノーパンの秘部が見えないよう懸命に隠そうとしているのが、初々しくて非常に愛らしい。両手も顔を覆って、自分の表情を隠すと同時に姉の感じる顔も見ないようにしているようだが、視界が覆われれば逆に、感覚が鋭くなることに気づいているのだろうか。

（うーん、素晴らしい光景だ……さて、どっちから責めてやるべきか――）

と――思わずがっつきそうになるも、その心を鎮めてまずは、二人の妹にしっかりと伝えてやらないといけない。思えば先の二回のデートでも、自分は二人の身体にばかり夢中になって、そのついでのように言葉をかけていたかもしれない。行為に及ぶ前に、きちんと自分の想いを、気持ちを、言葉にしてやらなければ同じことの繰り返しだ。

「二人とも、ありがとうな……俺の頼みを、こんな変態的なことでも聞いてくれて。すっげぇ嬉しいし……お前たちみたいな妹がいて、俺は最高に幸せだ」

そう言いながら背後から手を伸ばし、スカートに包まれた雪花の小振りなヒップを揉み捏ねつつ、こちらに伸びる月花の白い脚を撫でてやる。すぐさま二人はビクンッと身体を跳ねさせて反応し、まず声を上げたのは、下になった長身の妹のほうだった。

「っっ……バカッ、兄さんはバカですっ、大バカッ……こ、こんなことをさせられて、言われたって……う、嬉しくもなんともっ……ふっ、くぁぁぁっ……」

「そう？　あたしはすっごい嬉しいけどぉ……それに、ほらぁ……んっふふ～♪」

お尻を撫でられてピクピクと腰を震わせながら、雪花の膝が巧みに動き、月花の股間をグリグリと押し込んで、柔らかな刺激を送り込む。
「月ちゃん、言われた瞬間ここから涎だしちゃってるよ？　や～らしぃんだから～」
「ひふぅっっ、んっ、ちっ……違いますっ、それは――きゃふぅぅっっ！」
足首を掴んで引っ張り、靴下を脱がせてから、月花の足指に軽く口づける。なにをされているか、彼女からは見えないはずだ。そのせいか、言葉の途中で頓狂な声を響かせて脚をバタつかせ、月花が抵抗するように悲鳴混じりの嬌声をもらす。
「んひぁぁっ！　な、なにっ、ひゃっ、んひうっっ！　兄さん、なっ……んぁぁっ！」
夏場のソックスの下だけあって、凄まじい汗と蒸れ加減だった。けれど可愛い妹のそれであれば、まるで気にならない――というか。二人にしても、自分の汗を拭ったタオルであれだけ発情していたのだから、お互い様というところだろう。
「さて――それじゃ、見せてもらうぞ。二人がどんなことになってるか……」
何度も足の甲に口づけ、足指をねぶっているうちに、月花の脚の抵抗が弱まってゆく。それを見計らって直希は二人に近寄ると、二枚のスカートの裾を掴んで、じわじわと肌が露出するように、ゆっくりと捲り上げた。
「ふわっ……んっ、あ、あんまり、見ないでっ……」
しっかりとスカートを捲られ、そのままショーツのない局部を見られるのは、さすがに恥ずかしかったようだ。雪花の声が震え、空気に触れた尻房がピクンッと跳ね上がる。

スカートの下に白肌が覗き、柔らかそうなカーブを描いて尻肉が上向いて、その奥から濃厚な女の匂いを漂わせた。うっすらとした恥毛と尻谷間を晒し、その羞恥に肌を桃色に染めて、けれど淫唇はドロドロに濡れて淫液を滴らせ、股下の妹のお腹を濡らしてゆく。

「くっ、あっ……に、兄さん、お願いですから……普通に、させてくださいっ……」

お腹側のスカートの裾を捲られ、雪花の淫部と重なるように、月花の秘唇までが露わにされ、こちらに向かって桃色の粘膜を蕩け開いた。雪花のほうとは違い、きっちりと伸びて生え揃った陰毛が丁寧に剃られ、カットされ、潤んだ淫唇を飾るように絡み合う。

上の妹の未成熟に見える割れ目と、下の妹の成熟した淫裂が押し潰れ合い、濡れた恥毛と粘膜襞を擦り合わせ、ヌチャヌチャと卑猥な水音を奏でた。

「あはぁっ……んふふっ、月ちゃんのここ、すっごい濡れてる……ね、気持ちいい？」

「ね、姉さんっ……んきゅっ、そ、れはぁ……はぅっ、んんあぁっ！」

雪花が面白がって彼女の秘部を捏ねるのに対し、月花は消え入りたくなるほどの羞恥に包まれ、逃げようともがいていた。そんな二人の動きに合わせ、片方を助けて片方を抑止しようと、直希の手は、プリプリとした愛らしい桃尻を揉みながら強く押さえつけ、火照りだし汗ばんだスポーツ少女の太ももを撫で擦り、絶え間なく蜜汁を垂らす肉襞の端を、爪先でくすぐるように弄ってやる。

「んひぅぅっ⁉　んにっ、にいっ、しゃっ……んんぅぅっ！　まれっ、ひゃふぅっ！」

兄と姉、両方から責められた月花が艶めかしい悲鳴をもらし、下半身をガクガクと震え

させた。元々からの発情が限界に近かったせいか、その刺激を受けて彼女の脚は完全に脱力してしまい、もはや雪花が押さえずとも、暴れる様子さえ見せていない。ただ粘膜襞だけがグチュグチュと蠢動し、姉が腰を押しつけるだけで、自然と反応した腰が、迎え腰のようにカクカクと振られるばかりだった。

「あ〜、ずるいなぁ、月ちゃんばっかり……ほんっと、お兄ちゃんってば、月ちゃんに甘いんだからぁ……悔しいっ♪」

「こ、こぇっ、のっ……どこが、あっ……甘い、ん、ですか——くひぅぅっっ⁉」

普段とのギャップが可愛らしくてたまらず、しばらくは雪花と共謀するように、陰湿なタッチで月花の秘部をゆっくりと責め擦ってゆく。二人の淫唇の接合部に指を突き入れ、両方の牝肉を、感触を味わうように捏ねながら、下方の月花の秘部を狙って指を曲げて、掻きだすような動きで刺激を送り込む。

「ふくっっ……んぁぁぁっ、はふぅんっっ！　んっく、くふっ、ひぐぅぅっっ……」

ネトネトと絡みつくのは粘液ではなく、それを絡めて生き物のようにヒクついている、妹の牝口だった。茹だったお風呂のように熱い肉の感触が、擦れる直希の指を逃さないように吸いつき、ザラついた肉壁で舐めるように咀嚼し、扱き立ててくる。慌てて引っ張ろうとすると、吸いついた膣肉はおちょぼ口のように淫唇を伸ばして、逃げようとする指先に濃厚な口づけを浴びせてきた。

「あっはぁ♪　月ちゃん気持ちよさそう……ねっ、お兄ちゃん、そろそろあたしも——ん

ぅっ、くひぁぁぁんっ♥　んっ、きたっ、お兄ちゃんの指ぃっ、くふぅぅんっっ！」

それでもなんとか逃れると、反対側にある雪花の淫唇へ指の関節が食い込んだ。そちらはまるで、熟れ蕩けた果実のように柔らかく、ジューシーな牝果汁をたっぷりと含んでいたらしく、軽く淫裂を押し込んだだけで、手首まで滴るほど、大量の牝蜜が流れ落ちてきた。こちらも煮詰められたシロップのように濃厚で、垂れ落ちるそばから糸を引くほどに粘っこく、指関節を往復させて擦るだけでいやらしい音が大きく響き渡る。

――ヌチュルゥゥゥッ、グチュッッ、ズチュッ、チュブゥゥゥ……クチュゥゥッッ！

「んはうぅぅっっ♥　ひゃっ、やらっ、おにいひゃっ……あぁぁんっっ！」

「ふくっ、はぁぁっ……ね、姉さん、こそ……い、いやらしい、声っ、をぉっっ⁉」

上下の唇で嬌声と媚音を奏でる、姉妹のあまりに淫らな演奏会を目の当たりにし、直希はとうとう堪えきれずに両手を伸ばした。両手の指を束ねて伸ばし、先端をくねらせて入口を確かめるように淫部に這わせ、熱く蕩けた媚肉を指腹で何度も掻き擦ってゆく。

「ひゃうっ、あぅんっっ、んあぁぁっっ！　おにいっ、ちゃぁぁんっっ！」

「だ、ダメですっ、兄さ――くっふぅぅっっ♥　はふっ、はぁぁっっ……ダメっ、です……ほんとにぃっっ！　んんぅぅっ、す、スカート、汚れてっ、皺にぃ……あぁぁ……」

膣口を割り開いて指が埋没した瞬間、ヌルついた媚肉は同時に引き締まり、根元まで捻じ込んだ衝撃にビクビクッと蠢動を繰り返し、ペニスではないにもかかわらず直希を歓待してくれた。奥から溢れる淫蜜を掻きだしてやると、そのたびに雪花の尻房が跳ね、月花

の膝が持ち上がり、腰がカクカクとはしたなく振られる。
（はぁぁぁ……やっぱり、二人とも感じやすいなぁ……んでまた、その反応がいちいち可愛いんだよっ、くそぉっっ……）
できることなら抱き締めてキスしてやりたいところだが、お尻に顔を向けている以上、それは望めない。やむなく綺麗な脚や張りのある瑞々しいヒップラインへ舌を伸ばし、舌先でくすぐるように舐めながらキスを浴びせる。その途端、指を咥えた蜜壺の奥からはプチュゥッッと噴きだすように蜜汁がこぼれ、直希の両腕を肘まで濡らし汚した。
「にっ、兄さんっ、どこ舐めてっっ……いひぁぁぁっっ！　ひゃひっ、くひぃぃっ！」
「おにっ、ひゃっっ……んぁうっ、くっふぅぅぅうっ……ひぅんっ、んぁんっっ！」
さらに膣圧が高まり、指全体へ余すことなく柔らかな膣襞が押しつけられ、ゴシゴシと扱くように食みついてくる。力を入れずに抽挿させても、それだけで強く肉壁を擦られてしまうせいか、絡みつく粘膜を引っ張られる衝撃に、二人の妹が甘く啼いた。
「くぅふぅぅぅんっ……んぁっ、んんぁぁっ、ダメッ、それダメぇぇ……」
「ひぐっっ、あくっ、んぁぁっ！　あひぃぃっ！　ひっ、きそっ、あうぅぅっ……」
はっきりとしていた声音も震えだし、膝裏や太ももの裏側、ベッドと密着する腰回り――おそらくは背中もだろう。いつの間にか身体の細部にびっしょりと汗をかいて、身体中が小刻みな痙攣を見せ始める。膣内も引きつるような蠢動を繰り返し、指を食んで扱いていた心地よい動きだけでなく、激しく咀嚼するようなうねりを見せて、抽挿する指が痛

いほどに締めつけられた。
「ふむ……それじゃ、先にイッたほうはお預けな。イクのが我慢できたほうから先に、挿れさせてもらうってことで――用意、スタートッ！」
「――っっ⁉」「ちょっ、待って、おにぃ――んくっ、くあぁっっっ⁉」
抗議めいた呻きと、はっきりとした抗議が聞こえたものの、指を曲げて膣肉を掻き回した瞬間、二人は声を噛み殺して脚に力を込める。反論も後回しに絶頂を堪えるべく、足指をキュッと丸めて腰を引き、膝をガクガクと震わせて快感を遠ざけているようだった。
「つ、つきちゃ～ん？　え、んっ……んぅぅっ、遠慮っ、しないでいいよぉっ……アソコの、奥までぇっ、クチュクチュッ……さ、されてるんだからっ……」
「姉さんっ、こそぉ……んふぅっ！　ふぁっ、んっ、くぅっ……お、お先にぃ……どう、ぞぉっ……ジ、Gスポット、掻かれてイクのっ、お好きでしたよねっ……んぁぁっ！」
互いの性感を煽り、なんとか絶頂させてやろうとする貪欲な舌戦が、直希の淫らな欲望を駆り立てる。言われた通り、月花の最奥を目指すほど指を伸ばして膣肉を弄り、雪花にはGスポットを痛烈に押し込む刺激を与え、そこに親指での刺激も加えてゆく。
「んっひぃぃぃっっ♥　らめっ、にいひゃっ、にいひゃぁぁっっ！　クリッ、ひゃめっ……らめれすっっ、いっひゃ、いっひゃぅぅぅっっ♥」
「あはっ♥　月、ちゃぁっ……んふぅっ、可愛いっ……お目々、トロトロぉ……」
上向いて大口を開いた淫唇のやや上側、大粒の淫核が包皮を剥き上げて、ツンと突き立

っているのを探り当てると、強く押し潰すのではなく、淫液を絡めて指腹で丁寧に押し撫でてやる。たちまち声の呂律を蕩けさせた月花が腰を跳ねさせ、指の隙間から愛液をトロトロとしとどにもらし、保健室のシーツがグチョグチョに濡れ汚れてしまった。

（あっ……やばいな、これは……こういうのって、洗濯機とかあるんだっけ……）

保健の先生が帰ってきたら、シーツを引き剥がして窓から投げ捨てるしかない――そんな覚悟を決めながらも、無理にイカそうとするのではない、緩やかに追い詰めていく刺激を流し込み、月花の性感を高めるように責める。とはいえ、それで月花だけを二箇所責めしては不公平だ。雪花のほうも、もう一つの急所を責めてやらねばと、膣壺を擦る指を波打つように動かしながら、親指を懸命に伸ばし、突きだした尻房の谷間に添わせる。

「――っっ⁉　ひふぅぅっ……ひゃっ、う、そっ……やぁっっ！　ダメッ、お兄ちゃんっ……それダメェェッ！　ぜったい――ひぃんっ、んきゃふぅぅっっっ♥」

突き上がり、開かれた尻谷間の奥でヒクつく桃色の肉皺、その中心に親指を押しつけて螺旋を描かせる。緩やかな刺激のはずだが、それだけで雪花の肛門は即座に陥落し、膝を震わせて彼女は呻き声をもらした。

「んひぃぃぃっっ、ふぅぅっ、んくっっ……あっっ――」

ツプンッッと菊穴が指を咥え込み、開いた肉皺が指を咀嚼するようにわななく。咥え込もうとする肉体の反応と、絶対にイクまいとする雪花の理性がせめぎ合っていたが、本能を少しだけ後押しするように、直希が指先を捻って僅かに腸肉をこそぎ抉った。と――。

「いふふぅぅっっっ、んひゃっらっっ……ひやっっ、んひぐっっ、あうぅぅぅぅっっ♥」
緩んだ腸襞の絶妙なポイントを抉られ、雪花はたまらず、屈服の絶叫を響かせる。
肉皺が山頂の形を作るように伸びて、むしゃぶりつくように親指を咥え込んだ。そこから突き抜ける快感に、震えながら雪花の膝がまっすぐに張り、肛門を高く掲げるように尻房が持ち上がる。尻肉を揺らして腰はガクガクと震え、夥しい量の愛液がドロドロと膣穴から滴り、直希の腕を瞬く間に汚していった。
「んひぐっっ、ふぅぅぅんっっ……あぁぁぁっっっ、らめっ、イッひゃぅぅぅっ……」
「ね……ぇ、さっ……んくっ、あっ、はぁぁっ……」
腕も脚も伸びきって大股を開いた雪花の肢体が、先ほどまでの比ではないほど、我慢した分の反動が込み上げたように、激しい痙攣を見せつける。こちらからは見えないが、月花の息を呑んだ呟きから察するに、長女の蕩け顔はイキかけを通り越して、絶頂を迎えた牝顔を晒してしまっているのだろう。耳まで真っ赤になった彼女の声は、嗚咽混じりでくぐもった喘ぎが混じり、膣肉の痙攣が何度も指をしゃぶり、扱くように擦ってゆく。
「んぁっっ、イッッ……くっっ、ふぅぅっっ……いぐっっ、イグぅぅぅっっっ‼」
降伏宣言を声高に響かせると同時、諦めたように脱力した雪花の下半身が、身震いのような小さな動きを見せた。それと同時、彼女が上擦った声を懸命に絞りだし、眼下の妹の名を呼んで呼びかける。
「ごっっ……へぇっ……ごめ、んっ、ひゅきっ、ちゃぁぁんっ……んあぁぁっっ！」

「へっ――まっっ……ちょっ、姉さんっっ⁉」
制止させる月花の叫びより早く、雪花の下半身が崩れ落ち、そのままビクンッと大きく跳ね上がった。妹の身体の上に突っ伏した姉は、直希の指を咥え込んだままの股間を下方に、月花の股間へ擦りつけるように押しだし、尻房を小さく震わせた。
――プシュッッッッ……ブシュウウッッ、ブジュッッッッ……プシャァァァアッッ！
「ねえっ……さ、あぁっ……はぁぁっっ……」
月花の苦悶するような呻き、それに合わせて彼女のスカート、そして尻下のベッドシーツに濡れ染みが大きく広がってゆく。臭いがないことから潮だとはわかるが、妹のお腹やスカートへ、おしっこのように恥潮を浴びせかけてしまったことで、雪花は声を震わせての謝罪を繰り返した。
「ごめっ、んんぅっっ……つき、ちゃっ……ごめっ、ん……くふっ、ふぁぁっっっ！」
「しょうがないお姉ちゃんだな、雪花は……けど、俺のせいだよな、ゴメンゴメン」
「んくぅぅぅっっ⁉　わがっっ……わがったっ、からぁぁっっ！　おひりっっ、んひぃうぅぅっっ！　お、おひりっ、指抜いてぇぇっ！」
妹を宥めながらも指を抽挿させると、吸いついた肛門が引っ張りだされ、指の動きに合わせて小さな蠢動を繰り返す。そのたびに腰が抜けるほど感じてしまうのか、月花に抱きついたまま、雪花がビクンビクンッと尻房を跳ねさせる。その艶めかしい姿に劣情を煽られ、直希はズボンを下ろしてペニスを露出させた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!